



【鳥たちの聖戦】

第一部

【水のない晴れた海へ】

——これから語られるのはまだ来ていない夜の話し

空を夢見た黒鳥が太陽のような少年と出逢い

心躍る日々と穏やかな情を育んだ先の

決して逃れられない未来の話である——

贅の限りを尽くした豪華な王城の一室。

磨き上げられた調度と、隙なく整えられた寝台。

そのあまりに静謐な美しさの中で、

ひどく場違いな叫び声だけが鋭く響いていた。

革の枷に繋がれた若い黒鳥は、

身を裂くような恐怖と痛みに、壊れたようにもがく。

されど、少年の身体へ濃く影を落とす大鷲の前では、

その抵抗さえあまりにか細い。

逃げることも、拒むことも許されず、

ただ喉を震わせて鳴くしかなかった。

「ひいつ……!! いた、あ……つ……!! は、あ……つ……!!」

「……気を失ったか。……腑抜けな事よ。我の言う事を聞かぬから、此の様なことになるのだ。……まあ良い」

少年の苦痛に掠れた声が幾度も部屋に響きわたる。

けれど、身体を暴く男の無機質な声には、憐みの欠片もない。

そこにあるのは、逆らった獲物を力尽くで従わせようとする、

恐ろしく冷えた支配欲だけだった。

「……? ……あ……、や、やめ……つ……!!」

だ、誰か……だれかあつ……!!」

掠れた鳴き声は、ひどく幼く、頼りない。

濡れた視界が捕らえる、開かない扉。

助けなど、来るはずもないのに。

開けた光を求めて少年は泣き叫ぶ。

「囁るな。お前が誰のものであるか、今一度解らせてやろう」

その一言で、希望は完全に潰える。

必死の抵抗も、助けを求める悲痛な囁りも、

やがて水音と鈍い破裂音に吞まれ消えていく。

折られた翼から滲む赤が白いシーツを汚していく。

それに構うことすらせず、

若き鷲は金の瞳にぎらぎらとした欲を湛え、

漸く手に入れたその身体を無言のまま貪り尽くしていた。



——遙か昔、神話の時代と呼ばれた頃。

世界がまだ四つの大陸に分かれ、それぞれが国として存在していた時代の話である。

その内の一つ、中央に位置する大陸では、空を飛ぶ獣は神の使いとされ翼を持つ者は特別な存在として扱われていた。また、血の濃さは力の強さを併せ持つとされ、王とは選ばれた血脈の者になるのだと人々は信じていた。

ある年の夏、鷲を司る『白の国』と呼ばれた国家に歴史上もつとも麗しくもつとも強き皇子が生まれた。

白く大きな翼を携えたその精悍な姿は、生まれた瞬間から王となる運命を疑われることはなく、また成長とともにその力と知性は揺るぎないものとなり、同大陸内での権力争いは元より、他の三大陸との戦においても敗北を知ることにはなかった。

やがて周辺の国々は彼のもとに集い、白の国は帝国と呼ばれるようになる。

人々は彼の頭上に王冠を戴かせ、その傍らに跪いた。

——しかし、光は常に闇と対をなす。

一点の曇りのないと思われた帝国であっても、その華やかな歴史の裏にはやはり、語られることの少ない存在があった。

彼の血を分けたただ一人の弟。

闇より濃い黒い髪、と凩いだ風のような蒼い瞳。

兄とは正反対の、静かで儂げな容姿。

背には夜のように黒い翼を隠していた。

黒は不吉とされる色であり

帝国が大きくなるにつれ

『いずれ災いを招く存在になる』という噂が誰からともなく囁かれるようになる。

日を追うごとに冷たくなる周囲の視線と、止まぬ隔離の嘆願に優しい弟皇子は心を傷め、貴族に請われ苦渋の決断を迫られた兄王に困いの提案を命じられれば、それに抗うことなく日の当たらぬ高い塔に留め置かれることになった。

幸運であったのは衣食住に不自由はなく、兄王との面会も定期的に許されていたことだ。

不器用ながらも注がれる兄の気遣いを、彼は確かに感じていた。

『自分がこの場所にいれば帝国を徒に揺らすことも兄の心を痛ませることもない』

——そう思うことでその日々を受け入れていた。

それでも年に一度だけ、彼は心待ちにしている日があった。

春に行われる『建国祭』

その日だけは塔を出ることが許され、兄王の隣ではなくその影として公の場に立つことができた。

遠くから見上げる兄の背中はいつも変わらず誇らしく

弟皇子は穏やかな気持ちで兄を見守り
ささやかな幸せで心を満たしていた。

——その存在が

他国にとって『利用できるもの』になるまでは。

帝国の力を恐れた国々は彼を言葉巧みに攫い出し

「皇帝に蔑ろにされた悲劇の皇子」として祀り上げた。そして、その話は形を変え尾をつけ鱗をつける。

何時しか彼の出自も帝国の生まれではなく、美しさゆえに滅ぼされた国の御落胤となり、

帝国の圧政に苦しむ国々の間で
まことしやかな悲劇として反乱の象徴となっていく。

大切なものを奪われた王は病に伏し、

帝国は成長と同じ速さで崩れていく。
祀り上げられた彼の悲しみも、

気に留める者は誰もいなかった。

皮肉にも、兄と同じ初代皇帝の冠を載せられた時には、蒼い瞳からかつての穏やかな光は失われていた。

彼の治世は悲嘆と歪みに満ちたものとなり
その暴政は再び起きた反乱によって冠を奪われ、

帝国を追われたその日まで続くこととなる。

——影山が生まれたのは

そんな彼が息も絶え絶えに辿り着き
その身を葬らせたと伝えられる集落であった。

『いいかい飛雄。

お前は決して村の外へ出てはいけないよ。

外は恐ろしいところだ。

悪い獣が、お前の羽根を挽いで喰べてしまう。

だから——例え何があっても

この村を出てはいけない』

夜の帳のようにさらりと流れる黒髪と、星空を映した藍の瞳

日を通さぬほど鬱蒼とした森の奥深くにある集落から、

一步も外へ出たことのない肌は、

上等の絹布のように白く滑らかだ。

唯一異なる切長の毗だけは穏やかさよりも、

苛烈なまでの信念を宿しているが：

その背に生える漆黒の翼を含め

かつて語られた『弟皇子』の姿にあまりに似ていた。

それが理由なのか、あるいは掟を破り外界へ飛び立ち、

外の血を身に宿して戻ってきた『母』の罪のせいなのか。

影山は物心ついた頃から、

族長である祖父——『一与』をはじめ、

村の大人たちに囲われるようにして育てられてきた。

外界との接触は徹底して断たれ、

『空は見上げるもの』

決して飛ぶものではないと教え込まれてきた。

幼い頃は夜ごと語られる御伽噺のように、

成長するにつれそれは戒めへと変わって行く。

——それでも

空の向こうへと続く風の匂い。

鳥や虫が運んでくる見たこともない草花。

悪戯なニンフが囁く外の噂話。

穏やかな日常のみが流れる集落に

若い身体を持って余した心が動かされないはずもなかった。

そしてある日。

大人たちの視線が緩んだ、その僅かな隙を縫って
影山は村の外へと飛び出してしまった——

初めて飛んだ森の外の空。

沈みきる前の陽が蒼と橙を混ぜ合わせた夕暮れ。

そのあまりの美しさに心を奪われ、

夢中で空を駆けたせいで帰るべき場所を見失った。

——次に気づいた時、

影山は何故か、見覚えのあるように思う姿と異なる、
獣のような男に組み敷かれていた。

不思議なことに村を出てからの記憶は

霞がかかったように曖昧だ。

それでもあの日見た空と、ここで初めて目にした空の色が
同じだったことだけははっきりと覚えている。

——きつと、村を出てから

そう遠くないうちに捕まったのだろう。

(こんなことになるなら……)

一与さんの言うことを聞いていればよかった……)

折られた翼の痛みだけではない涙が

藍の瞳から零れ白いシーツを濡らしていく。

逃げるための風切り羽根は奪われ、

細い四肢は柔らかな革の鎖で繋がれている。

見せしめのように折られた翼が、

揺さぶられる度に傷口を抉り、

痛みと快樂の境が曖昧になっていく。

気概も体躯も他に比べて恵まれていると、

村ではそう言われ育ってきた。

だがどれほど強く抗い暴れようとも、

この男の強靱な身体はまるで岩のように微動だにしない。

効かぬ抗いにやがて思考も気力も擦り切れ、

影山はただ身を委ねるしかなくなっていた。

——もう二度と空を駆けることはないのだろう。

この鳥籠の中で生涯を終えるのか。

あるいは男の興が削がれた時、

外へ放り出される日待つか。

どちらにせよ、もう母のように村へ戻ることはできない。

それは、軽い気持ちで犯した過ちに対する

あまりにも大きな代償だった。

——いつになれば、終わるのだろうか

絶え間ない水音と破裂音の間隙に、

徐々に混ざる、切なく鳴く自分の声に耳を塞ぎたくなる。

終わりの見えない凌辱に、快楽を見出し始めた体が恐ろしく、
涙に濡れた視線で乞うように見上げれば、

一瞬の揺らぎの後、猛禽類のようにこちらを縛り付けていた
金の目が、憂いを帯びた——

大地に実る稲穂のような柔らかな色へと変わった。

——纏う空気までもが変わったような…？

その奇妙な変化に戸惑いが胸をかすめる

その僅かな間を衝いて、男は頭を抱え小さく首を振る。

再び金の光が戻る。

——猛禽のような鋭さが、その瞳に宿る。

背筋が凍るような威圧感に息が詰まり、苦しくなる。

凍えるように震える身体を穿つ剛直が膨らみ、

低い唸り声をあげた獣が最奥を抉り、精を放つ。

身体を燻る熱が消えるのに安堵する間もなく、

乱暴に扱わればかりと開いた孔から、

零れ落ちぬようにと指の腹で栓をされ、

薄い腹を慈しむように撫でられる。

「……早くその胎に、我の仔を宿せ」

「……？」

俺は、男です……」

見ればわかるだろう。

宿す器など初めから備えてはいない。

自然と向けた拒絶の視線を、

男はなぜか愉しげに受け止めた。

「我を誰だと思っている？

造り替えることは難しいが、

付け加えることなら造作もない。

……あの『橙の男』にはそれも叶わなかっただろうがな」

「……え……？」

腹に触れられた掌から、びり、と魔力が流れ込む。

身体の奥に何かが形作られていく感覚と

身を焦がすような灼熱が全身を伝っていく

泣き叫びたくなるほどの痛みに意識が遠のきそうになる中

影山は密かに一与から教わった『浄化の術』を施した。

……これで宿ることはない。そう信じながら。

表情には孕むことへの恐怖を浮かべたまま

心の奥で小さく息をつく。

「……無駄だ」

ささやかな抵抗を見抜くように、

低く笑う声が、高い天井を伝い室内に響く。

「その身をいくら清めようと

追いつかぬほど、何度でも深く、注いでやる。

無駄に消してしまいうくらいなら

これから宿し、育てるもののために使え」

喉を鳴らして笑うその顔を見て

今度こそ影山の心はぼきりと音を立てて崩れた。

世界が暗闇に沈むように意識が落ちていく。

まどろむように沈み、消えゆく意識の中で、

何故かあの日見た橙のような空の色に

よく似た男の貌を見たような気がして

何故だろうか、無性に哀しくなった。

「……だから早く、^{（イセル）}我の子を宿せ、^{（アトラ）}黒鳥」

気を失いシートに沈む黒髪を掻き分け

慈しむように額の聖痕に口づける。

その表情に宿る歪んだ純愛を

その身本来の主の嘆きを

——見る者は誰もいなかった。

【今宵エデンの片隅で】

「あゝゝ!!! 研磨!! こんなところにいたんだな!
やっと見つけたあ!! 怪我とかしてないか!？」

「…あ、翔陽。来てくれたんだ……ありがとう。大丈夫だよ」

郊外へ続く街道で、三毛色の猫耳がひっそりと揺れた。
人の流れに紛れるように歩いてきたその姿を見つけた途端、
俺は一気に駆け出していた。

声をかけると、研磨はわずかに肩を揺らし、
それからいつも通りの薄い表情でこくりと頷く。

「連れてかれたっていう王城のほうに行ったら、
悪そうなやつらは寝てるし、牢屋はもぬけの殻だしで、
ほんとびっくりしたぞ! やっぱりすげえな、研磨!!」

「……だから言ったデシヨ。
赤の国の智将が、どっかの誰かさんみたいに、
いつまでものんびり捕虜になってるわけないって」

「万が一! 万が一ってことだつてあるだろ!!」

わざとらしいため息と一緒に、月島が眼鏡を押し上げる。
いかにも呆れた、という顔だ。

「月島も来てくれたんだ。珍しいね、ありがとう」

「……別に。青の国に行く途中だったから、方向が同じだった
ただけで。このチビに無理やり連れてこられたんですよ」

そこで言葉を切ると、月島の目がすつと細くなり、
獲物を見つけた学者みたいな顔になる。

「……で、何か『掘り出し物』はありましたか？」

もちろん、と言いたげに研磨が目を細める。

差し出されたのは、古びてはいるが重厚な装丁の書物と、
意匠を凝らした装飾品の数々だった。

どこにそんな隠し場所があったのかと感心するくらい、
次から次へと『掘り出し物』が現れる。

その一つに手を伸ばしながら、月島が低く言った。

「何の見返りもなしに、あなたがこんな荒れ果てた
国の捕虜になるわけないですからね。」

「……へえ、さすがは黒の国。
帝都では絶版で手に入らないような本ばかりだ」

しつとりとした牛革の表紙を撫でる指先は、妙に丁寧だった。
けれど口から出るのは、嫌味たっぷりの息ばかり。

「……はあ。こんな価値もわからない荒くれ者の国じゃなきゃ、もっと長く滞在したいのに……」

「ふふ、だよね。空気は……アレだけど、日は高くないし。避暑地には良さそう。俺の国は年中暑いから……」

「……よくわかんねーけど、その本そんなにすげえの？
何書いてるのか全然わかんねーんだけど……」

「あ！研磨!! 俺、このかつこいい飾り欲しい!!」

「いいよ。ついでに持ってきたものだし」

「バカにはわかんなくて当たり前デシヨ」

「ふふ、だよねツツキー! でもすごいや、見てこの発行日!
ヴァリロア歴一〇九年だって。七百年も前だよ!

しかもこんなに状態がいいなんて、本当にすごい!!
こっちは戦の本、こっちは生活の知恵……」

「とうのうえの……」こっちは、御伽かな?」

大振りの翼をかたどった装飾品に俺が目を輝かせている横で、山口もまた本の頁を夢中でめくっていた。

拾い上げた一冊を月島がちらりと見て、口元を歪める。

「チビにはそれがいいんじゃない?

年中お花畑なお子様にびったりな本があってよかったね」
「なんだとー!!」

すぐさま囁みつく俺を見て、研磨がくすりと笑う。

そのまま何かに気づいたように後ろを振り返った。
頭上の大きな耳が、近づいてくる足音を拾ったらしい。

「はは、翔陽たちはいつも賑やかだね。

……あ、クロたちだ。じゃあまたね、翔陽」

地平線の先に、赤の国からの迎えが見える。

研磨は小さく手を振ると、

身軽な足取りでそちらへ駆けていった。

風に揺れる三毛色の耳が見えなくなるまで、
俺はしばらくその背中を見送っていた。

「いやあ、誘われた時はどうしようかと思ったけど、
終わってみたら意外とあっさりだったね」

「だな! ようやくこの俺のスーパー剣技で
敵をバツバツ倒していくチャンス!

だと思っただのによおー!!」

ぶんぶんと腕を振って、こうして、こう、ズバツと――
と身振りまでつけてみせる。

いつか旅立つ時のためにこっそり練習していた、
俺のスペシャル剣舞。披露する機会は結局なかったけど、

研磨もみんなも無事だったんだから、まあいいかとも思う。

「ははっ、日向らしいね。でもまあ、せっかく皇帝様から直々に貰ったその剣、使わず仕舞いはもつたいないかもね」
「だよな！ この剣を貰った時、俺、ここで手柄を立てたらもしかして!? なんて思っちゃったもんなあ!!」

帝国騎士団を束ねる皇帝様は、とんでもなくすごい人だ。いつだって威厳たっぷり、目が合うだけで背筋が伸びる。遠目にしか見たことはないけど、それでもわかる。

あの人のまわりだけ空気の重さが違う。
そんな皇帝様から、俺は直々に――

【この度黒の国が起こした、帝国領を通しての赤の国への侵略戦争に対する貴殿の勇氣ある決断に感謝し、褒賞を贈る。事件の早期解決と貴殿の健闘を祈る】

——そんな立派な文面の手紙と一緒に、見るからに強そうな剣まで授かってしまったのだ。あの日は興奮しすぎて、布団に入ってから目が冴えて眠れなかった。

「……いくら他に手が回らなかった時だからとはいえ、チビには過ぎたものだったね。

まあ、お飾りにならないように、せいぜい精進しなよ」
「わかってるって!! 本当、いちいちイヤミな奴だな!!」

俺たちの暮らす大陸『ヴァリロア』は、世界樹を中心に広がるドーナツ型の大陸で、大地は大きく、六つの国に分かれている。

大陸の中央に位置し、周囲の五カ国を束ねているのが、俺の故郷である『白の国』。

そこから北を見れば、雪と氷に閉ざされた『灰の国』。

北東には、狐の耳を持つ人々が暮らす『紅の国』。

南東には、研磨たちが住まう、暖かく山深い『赤の国』。西には、聖樹の血を引く王が治める『青の国』。

——そして今、俺たちが足を踏み入れているのが、王を失い、ならず者の巢窟と化した『黒の国』だ。

俺たちが生まれるよりずっと昔、この大陸では大きな戦が絶えなかったらしく、今もあちこちに争いの跡が残されている。だけど、帝国が法を整え、軍で治安を維持し、各国の交易を盛んにしたおかげで、今はとても平和な暮らしができています。それでも、火種が完全に消え去ったわけではなく、

国家間の水面下の睨み合いや、国内外に根づく種族差別。

今もなお、理不尽に虐げられ、不自由な暮らしを強いられる人々が存在しているのを忘れてはいけない――

——士官学校の授業では、確かにそう習った。

「……って、先生は言ってたけど……」

「国同士の争いとか、差別とかって本当にあるのかなあ？」

自分が生きるために誰かを傷つける——

そんな現実を、俺は身近に感じたことがなかった。

だから、その話がどうにも実感できなくて、あるとき、ついそんなふうにごぼしたら、月島は一度わざと聞こえないふりをしてから、うんざりしたように言った。

「はあ？」

「……………橙の国の公子様はずいぶん呑気だね。」

そんなおめでたい頭でよくやっていけるよ。」

……………澤村王の胃が痛むわけだ」

父ちゃんは関係ないだろ！と、そのときは素直に腹が立った。けれど、優しい両親に守られて育ち、平和な帝国の外をほとんど知らなかった俺には、それでもまだびんときていなくて、どこか、遠い世界の話だと思っていったんだ。

——この国に足を踏み入れたその日にスリに遭って、少なくとも全財産をきれいに持っていかれるまでは。

——まず、空気が重い。空気が読めないって散々言われる俺でもわかるくらい、街じゅうが暗く淀んでいた。

湿った石壁みたいな匂いに、かすかなカビ臭さが混じって鼻につく。空そのものが薄暗い布で覆われているみたいで、息をするだけで胸が詰まった。

それに、そこで暮らす人たちには、まるで活気がなかった。どこを見ているのかわからない目で道端にしゃがみ込む人。壁にもたれたまま、微動だにしない人。生きてはいるのに、生気だけが薄く剥がれ落ちてしまったみたいだった。

大男に襲われていた女の子を助けたときも、そうだ。震えていたから「怪我してないか？」と声をかけたけど、その子は俺と目も合わせず、悲鳴を上げて逃げていった。

「……当たり前デショ。この国の人たちは生まれた時から明日どうなるかわからない暮らしをしてる。」

そんな中、得体の知れない身なりのやたら綺麗なアホ面のチビがヘラヘラ話しかけてきたら、恐怖でしかないよね」

月島の言い方は腹が立つ。

けれど、たぶんそれが正解だった。

反論できないまま黙り込んだ胸の奥に、ざらついたものだけが残った。

——なんか、こういうの、嫌だな。

胸の奥に引つかかったものは、うまく言葉にならなかった。ただ、見て見ぬふりをして通り過ぎるのは違う気がした。俺にできることなんて、たかが知れている。

国を変える力も、誰かの暮らしを一気に楽にしてやれるような知恵もない。

だけど……そうだな、目の前でうつむいている人がいるなら、少しでも顔を上げてほしかった。ただ、それだけの想い。今日一日だけでも「悪くなかった」と思ってもらえたらいい。そんな気持ちだが、じっとしていることを許してくれなかった。

だから俺は、道で会う人にできるだけ声をかけまくった。重そうな荷物を見つければ運び、困っていそうな顔があれば立ち止まった。何をすればこの国が明るくなるんだろう、なんて難しいことを考えるより先に、手も足も勝手に動いていたんだ。

最初は、怪しまれてばかりだった。

でも、何度も顔を合わせるうちに、そっけなかった返事が少しかだけ柔らかくなっていく。

目も合わせてくれなかった人が、ある日ふっと口元を緩める。そんな小さな変化が、ひとつ、またひとつと増えていった。

それだけで、十分だった。

研磨も助けられたし、短い間だったけど、俺にとってはちゃんと意味のある時間だったと思う。

できるなら、もう少しここにいたかった。

宿のおばちゃんが教えてくれた美味い店にも行ってみたかったし、水の綺麗な黒鳥の森って場所も、この目で見てみたかった。

——そんなことを、ぼんやり考えながら歩いていると、

「……チョット、何考えてるか知らないけど、

目的が済んだなら次行くよ」

「へ？ 次って……」

「……………三歩歩いたら忘れちゃうの？ この鳥頭は、

僕を手伝うから同行するって、自分から言い出したよね？

頭の中を見てみたいよ。バカが移りそうで見たくないけど」

「がああー!! ちよつと忘れてただけなのに、

そんなに怒んなくたっていいだろ!!」

月鳥が煽り、俺が嘯みつき、山口がなだめに入る。

いつもの代わり映えのしないやり取り。

——だけど次の瞬間、

変わらない日常を切り裂くように、激しい羽音が響いた。

音に驚き振り返った先に飛び込んだ来たのは、キラキラと輝く黒い塊

「……ッ!!」

助けを求めるように高く上がる悲鳴。

必死に、狂ったように空を掻く、大きな黒い羽。

泣き出しそうに揺れる、吸い込まれそうな藍の瞳。

視線が交じった瞬間、周りの音とか全部聞こえなくなっ
てぐあつと熱いものが体の芯を駆け抜けた気がした。

「ちっ、くそっ、しっつけえ!! あ、そこのお前!! 助ける!!」

「へ、あ! お、俺!?」

「誰でもいい!! 助けるポケエー!!」

黒髪の少年が叫びながらこちらへ突っ込んでくる。
喉までせり上がってくるみたいな心臓の音がうるさくて、
一瞬どうしようかと思ってしまう。

——でも、困ってるなら助けなきゃだろ。

「じゃ、じゃあ!! こっち捕まって…… 翔ぶぞ!!」

ぶつかるような勢いで飛び込んできた体を
どうにか抱きとめ、俺は地を蹴った。

——思いきり、高く。 空へ。

少年を抱えたまま、雲を突き抜けそうな勢いでぐんぐん上昇
していく。

俺の羽は体に比べて小さくてふわりと浮かんで飛ぶのには
向いていない。けれど、大昔に兎の獣人の血が混じったとか
で、上へ跳ねる力だけは誰にも負けないんだ。

月島には「鳥人として自慢にもならないでしょ」と笑われる
けど、ついに役立つ時が来たんだ。見てるか月島!

……あ、でも下にいるおつかない連中の相手は任せたぞ!!

そんなことを考えていた時だった。腕の中で必死にしがみついてくる少年と、不意に目が合った。

その瞬間、息が止まる。

深い藍の瞳は、夜空みたいにまっすぐで、吸い込まれそうなくらい澄んでいる。

風に揺れる黒髪はさらさらと流れて、夕焼けの光を受けた頬はほんのり赤い。

背中に広がる黒い羽は、沈みかけた陽を受けてきらりと光っていた。

遠くから見た時も、綺麗だと思った。でも、近くで見るとそんなの比べものにならなかった。

何十倍も、何百倍も、綺麗だった。

胸の奥で心臓がどくどくとうるさい。熱が一気に体の中を駆け上がって、目を逸らした方がいいのに逸らせない。もっと見ていたい、その気持ちだけがどンドン膨らんでいく。

たぶん、この瞬間。

俺の中で、何かが一気に変わった。

だから、思わず――

「……………きれいだ」

喉をすべるように、本音がそのまま零れ落ちた。



「キレイ……………あ、本当だ。綺麗な夕焼け……………」

ふいに、確かめるように少年が俺の肩越しに空を見ようとす
るまで、俺たちはお互いを見つめたまま固まった。

「あ!!! だ、だよな!!!」

夕焼け!! き、綺麗だよな!!!」

変な意味に取られなくて助かったけど、
なんだか悲しいような気もして、俺の頭はもうパニックだ。

「あ、お前大丈夫か? 怪我とかは……………」

どこにも……………無いみたいだな、よかった!!!」

夕陽に見惚れてる少年の体をあちこち確かめて、
ホッとした勢いでつい、ぎゅっと抱きしめてしまう。

「っ! ……………ああ。大丈夫だ。…………助かった、ありがとう」

スリッ、とお礼を言うみたいに少年が俺の胸元に顔を寄せて
くる。途端、心臓の音がうるさい位響いて顔が熱くなった。

「…………お前、凄いな。俺、こんなの、初めてだ。」

ふわり、と。

夕日に溶けるような、宝石みたいな瞳を輝かせて、
目の前いっぱい花が咲くように少年が笑う。

その顔があまりに眩しくて、ついに心臓が止まるかと思った。

「だ、だろ!? 俺!!! 高さにだけは自信があるん

……………だ」

……………あ。

褒められたことに舞い上がった心に、

限界を知らせるみたいに背中がピキリと鳴った。

「? ……………どうした?」

「その……………高くは翔べるんだけど……………俺、

パタパタ羽ばたくのとか、苦手……………その……………」

「? ……」

上には翔べるけど、横には飛べない。

いっぱいいっぱいになって忘れてた。俺の、一番の弱点。

内心冷や汗だらだらで視線を合わせれない俺の顔を、

少年は小首をかしげ不思議そうに見上げてくる。

その仕草も可愛くて、悲しいかなぐつと来てしまうが…………

「……………ごめんなさい」

落ちます!!!!!!!!

「……………へ? 嘘だろ!?

……………はあ、な、あああー!!!!!?!?!

カクン、と急激に視界が下がる。

恐る恐る下を見れば、さっきまであんなに遠かった森が、すぐそこに見えた。

「なああああああ!!!!!!!!!!

このポケエエエエエ!!!!!!!!!!

「ごめんなさあああああ!!!!!!!!!!

——二羽の、空を突き抜けるような叫び声が、国中に響き渡った。

「ライブ……ったく。山口が咄嗟にプロテクトを張ってくれなかつたら、二人そろって『押し鳥』になってただけだ。」

「……ちゃんとお礼言いなよ」

森の茂みに突っ込んだ俺たちを見下ろして、月島が呆れたようにため息をついた。

「ハハッ、大丈夫だよ日向。間に合つてよかった。」

相変わらずよく跳ぶよねえ。

見えなくなっちゃったから、どうしようかと思つたよ」

山口は苦笑しながら、

俺たちを包んでいた淡い光の膜をほどく。

「あ、ありがとう山口〜!!」

「飛べねえなら最初から飛ぶなポケエ!!」

死ぬかと思つたじゃねえかポケエ!!」

俺の腕の中で、黒髪の少年が顔を真っ赤にして怒鳴る。

助かつたばかりなのに口悪いなあ、とか一瞬思つたけど必死に怒つてる顔までなんか……不思議と目が離せない。

「……キミも人のこと言えないよね。」

わざわざ一緒に落ちてこなくてもよかつたデシヨ。

その背中にあるのは飾りなの?」

「っ……それは……突然だったから、

その……わかんなくなつちまつたんだよ!!」

月島に言われて、少年は気まずそうに目を逸らす。

さっきまであんなに強気だったのに、

そういう顔もするんだなつて、なんとなく思う。

「……まあいいけど。キミたちがあんまり高く跳ぶから、

追いかけてた連中も驚いて逃げちゃつたし。

……で?なんであんな奴らに追いかけてたワケ?」

「……………んぬん」

「はあ?」

「わかんねえつて言つてんだよ!!」

高く売るとかよくわかんねえ事言つて近寄ってきたから、気持ち悪くて逃げたら追いかけてきたんだ!」

「言つてないデシヨ……。高く売る、ね。」

——はあ、まあそんなところだろうと思つた」

少年は怒りながら、おいとか聞けとか訴えてるけれど、それら全てを無視した月島が、納得したように肩をすくめた。

「あ、危ないところだったんだなあお前!!」

俺はそんなやつ見たことないけど、人攫いとか変態って奴に捕まると大変な目にあうって聞いたことある！
何もなくて本当によかったなあ!!」

本気で心配してつい身を乗り出すように覗き込むと、
少し驚いたような顔をした少年がちらつとこつちを見た。
それだけなのに、なんかまた胸の辺りが変にうるさくなる。

「……お前のせいで死にかけたけどな。
でもまあ……助かった。
……ありがとう」

そう言って、少年はふいっと横を向く。
怒鳴る声に比べてすげえ声は小さいけど、
でもちゃんと聞こえた。その一言が、なんか妙にうれしい。

「お礼ならせめて目を見て言いなよ。」

……で、どこから来たのキミ？
見たところ、まだ未成年だよね。
そろそろ家に帰らないと怒られるんじゃない？」

「そんな歳じゃねえ!!
えつと……あつちの、森だ」

少し考え込むような顔をして少年が指さす。

その先にあるのは、切れ目なく続く森、森、森。

「は？」

「だから！あつちの森だって言ってるだろ!!」

「バカなのキミ？ この国、360度どこ見たって
森しかないじゃん。もつと目印とかないわけ？」

「バカにすんな！
え……と、水があつて、花畑があつて……」

あ、曲がり道にリスがいる!!」

「……………山口、僕、迷子は専門外なんだけど」

「ははは……参ったねえ、これは……」

月島が呆れた顔をして肩をすくめ、
山口は困ったように頭をかいた。

「え!? なんだお前、迷子なのか??」

「迷子じゃねえ!!」

ちよつと……帰り方がわかんねえただけだ!!」

むきになって言い返すのに、ちよつとだけ困ったみたいな顔をしてるのがなんか……放っておけないって思ってしまう。

「それを迷子って言うんだよ。……はあ、もうどうするの?

僕、こいつの家まで探してる時間なんてないんだ——」

「えー!! だったら俺たちと一緒に行けばいいじゃん!!」

「チョット!? 遮らないでくれる!」

しかも何勝手に決めてんのさ、このチビ!!」

月島の抗議に聞こえないふりをして、少年に顔を寄せる。だって折角会えたのに、ここでお別れなんて勿体ない!!

「一緒に?」

「そうそう!! 俺たち今から隣の『青の国』に行くんだ。

その王様はこの大陸で一番長生きらしいから、

お前の家のことだって知ってるかもしれねえじゃん!」

「青の国……王様……」

——もう一押しだ!!

「どうせ帰れないならさ、行こうぜ一緒に!

絶対絶対楽しいから!! な? なな??」

少年は悩むように視線をきよろきよろ動かしたり

じつと俺を見ていたけど、やがて小さく息を吐いた。

「……仕方ねえな。行つてやるよ」

「やったー!! じゃあ行こう! 俺たち今日から仲間だぞ、

チームだからな! 仲良くしようぜ!!」

「……チーム……!」

その言葉を小さく繰り返した顔が、

さっきよりちよつとだけやわらかく見えた。

気のせいかもしれない。でも、それだけでなんかうれしくて俺はついにやにやしそうになる。

——もつと話したいな、とか。

——もつといろんな顔、見てみたいな、とか。

なんでかはわからないけど……そんなことを思ってる自分

あとから少しだけびっくりすることになるけれど、

その時の俺は少年の傍に居れる時間が伸びたことが

純粋にうれしくて、跳ねるように空を舞った。

少し離れた場所で、月島と山口が声を潜める。
視線の先にいるのは、日向に手を引かれながら、
ぶつきらぼうに歩く黒鳥の少年。

「……ねえ、いいのツツキー。あれって……」

「……黒鳥、デシヨ。国に災いをもたらす『危険種』だっけ？
頭の固い連中の考えることなんて、本当にくだらないよね。

……ただの黒い鳥じゃん」

日向に振り回されて怒ったり慌てたりと忙しい少年を、
ため息交じりの冷めた目で見つめる。

「……それに見てよ、あのアホ面。国をどうにかできるタマ
だと思おう？ まあ、容姿が整っていることは認めるけど

……あの目つきじゃダメだね。国どころか、人一人だって
落とせず逃げられるよ」

「確かに……あはは。黒鳥ってもっとおどろおどろしくくて
怖い位に美しいって感じかと思ってたけど、全然違うね」

「まあ、次の行き先は帝国と対立していた『青の国』だし、
悪いようにはならないんじゃない？

帝国では悪神でも、他国じゃ聖神なんてよくある話デシヨ」

「へ〜!! 確かに! さすがだねツツキー!!」

「……そのまま帝国に連れて行ってもいいかもね。
ありもしない厄災に怯える古狸どもの顔……
想像するだけで笑っちゃう」

月島の口元に、不敵な笑みが浮かぶ。

それを見て、山口がふと思いついたように呟いた。

「……相変わらずだねツツキー。あ、でもアレだね、影山。
ツツキーが尊敬してたあの人に、ちよつと似てるかも？
ほら、一代前の皇帝のお后さま……」

「……その話は今、関係ないデシヨ。山口」

月島の声が、一瞬だけ鋭くなる。

「ごめん、ツツキー!」

「あ、そういえばお前、名前は？
俺は翔陽、日向翔陽！ よろしくな！」

夕闇の迫る森の中、俺が差し出した手を、
少年は少しためらってからぎこちなく握り返した。

「日向……俺は影山だ。影山……飛雄。……よろしく」

その手は少し冷たくて、
でも思ったよりちゃんと力強くて。

影山、飛雄。

名前の形を確かめるように口の中で転がしてみると、
なんか妙にしっくりきてちよつと感動した。

——ヴァリロア歴八一九年。

俺の中の運命の歯車が、静かに音を立てて回り始めた。

「そういえばキミ、まともに戦えるの？」

見たところ、武器のひとつも持ってないみたいだけど」

青の国へ続く道中、ふいに影山を値踏みするような目で見た。

「武器……？」

「……チョット。さすがに非戦闘民を守りながらの旅なんて
普通に無理なただけだ。」

「……日向、責任持ってちゃんと守りなよ」

「おう！ 任せられよ、影山くん!!」

胸をどんと叩く俺の横で、

影山は少しだけ考え込むように眉を寄せた。

「武器ってのはよくわかんねえけど」

「……こんなんだったらできるぞ」

影山がすつと手を上げ、指先で空をなぞる。

その瞬間、何もない空間から眩い光の弓矢がいくつも現れ、
閃いたと思った次の瞬間には、街道脇の大木が紙みたいに
裂けて、真つ二つに倒れていた。

「は？」「え？」

月島の眼鏡がわずかにずれた。
山口も言葉を手放して固まっている。

「すげえ!! 真つ二つだ!!」

俺だけが目を輝かせて騒ぐ中、影山は気にした様子もなく
淡々と言葉を続けていく。

「あと……こんなんとか」

今度は地面をたんと音を立てて軽く踏む。
次の瞬間、風が渦を巻いて巻き上がり、
地面を丸くえぐりながら俺の体をふわりと持ち上げた。

「すげええええ!!」

あ! なあ、これ使ったら俺を飛ばしたりできるのか!?!
「できんじゃねえか? ……おら、飛べ!!」

影山は俺を包んでいた風の塊に指先を滑らせると、
空へ線を描くように静かに腕を振った。

すると風の渦は生き物みたいにしなやかにうねり、俺の体を
やさしく抱え上げる。そのまま、見えない手に持ち上げられ
るみたいに、俺は高く空へ運ばれていった。

「うひょーっ!! すげえすげえ! 飛べる! 俺、飛んでるぞ!!」

足の裏から地面の感触が消えて、身体がふつと軽くなる。
重力なんてなかったみたいに、空中でぐるぐる回れる。

「……初めてやってみたけど、面白ええな、これ」

すいすいと、影山の指の動きに合わせて風向きが変わり、
その流れに乗って上昇したり、旋回したりを繰り返せば、
俺を操作している影山の声も少し楽しそうに弾む。

おい、次はこつち、今度は……と口は悪いけど声は弾んでいて、
それが嬉しくて、なんだかこつちまで気分が上がる

けれど、その隣で月島の顔色だけが、
みるみる悪くなっている。

「……………」

「……ねえ、ツツキー。あれって……」

「……………聞かないで、山口」

月島は言い切ると、真つ二つに裂けた大木の断面と、
俺を思い通りに運ぶ風の流れを交互に見つめた。

理解が追いつかない、という表情のまま、低い声で続ける。

「……信じられない。あれは熟練の宮廷魔道士でも、
数分の詠唱が必要な最高位の上級魔法だよ？それを、
あんな……魔導書もなしに、指一本で……ありえない……」

月島のぶつぶつと呟く声は途切れない。

ひとしきり飛び回ったあと俺は地上へ戻され、
着地の勢いのまま俺は影山に駆け寄った。

「すげえなお前!? 実はすげえ魔道士だったりしたのか!？」

興奮して身振り手振りで感動を伝える俺に、
影山は心底不思議そうに首を傾げた。

「？魔道士ってのはわかんねえけど……」

「これ、鹿とか捕まえるのに便利なんだよ」
「……は？」

「あとは……汚れ物を綺麗にする術とか、
ゴミをまとめて……捨てる魔法とか……」

「一与さんが教えてくれたんだけど。
そんなに珍しいのか、これ」

「……汚れ物を、綺麗に……浄化魔法を……洗濯に……?？」

月島が、信じられないものを見る目で天を仰いだ。

「……高位魔法の、あまりに雑な使われ方に言葉も出ないん
だけど……キミ、その力で国のひとつやふたつ、簡単に滅ぼ
せるって自覚ある？」

「……は？　なんでそんなことすんだよ、ポケエ。
汚れたもんはピカピカにしたほうがいいだろ」

影山は本気で理解できない顔で言い返す。

悪意どころか、そういう発想自体がないらしい。

二人の思考のあまりの噛み合わなさに、

山口は乾いた笑いを漏らすしかなかった。

「……世間知らずって、本当に怖いね……あはは……」

大陸の勢力図をひっくり返しかねない力が、
今のところは肉を焼いたり洗濯物を乾かしたりするために、
惜しげもなく使われる予定らしい。

「……ところで、ゴミ捨て魔法って何？」

もういちいち驚きたくないから、

早めに教えてほしいんだけど」

「ん？ そうだな。たとえばその石を……えいっ」

「うおおおおおお！」

なんか、ばあ！ って光ったらバシユッて消えたな!!」

「ええええええ、あれってもしかして……」

「………よりよって『転移魔法』かよ!？」

あれ、帝国の筆頭魔道士が一生に一度、使えるかどうかの
秘奥義なんだけど……。それをたかがゴミ捨てに使うなんて

………魔法に対する冒涜だよ………!!!!」

「？一与さんは『魔法の基本はお片付け!』って言ってたぞ」

「………その一与さんっていうのは、一体何者なのさ!」

「??一与さんは一与さんだぞ?」

黒の国の重たいカビ臭さが嘘みたいに、
青の国へ続く街道の夜は澄んでいた。

やわらかな草の匂いに包まれて、
歩いているだけで肩の力が抜けていく…

さらに若い俺たちを喜ばせたのが、

岩陰からこんこんと湧き出す天然の温泉だった。

……はずだったのだが。

「ぎゃああああ!? あ、熱い!! 熱いぞこれ!!

殺す気かボケェ!!」

「わあっ! 影山、暴れるなよ!! 気持ちいいだろ!？」

「嘘つけ! 煮え湯だ!! 拷問だ!!」

俺は水浴びでいいんだよ!!」

人生初の温泉に、影山は本当に猫みたいに毛を逆立てて逃げ
出そうとした。結局、俺に羽交い締めになれ、山口になだめ
られ、数秒だけ浸かるのが精いっぱいだった。

湯から上がってきた影山は、茹でダコみたいに顔を真っ赤に
して、焚き火の前にべたりと座り込む。

「……風呂……恐ろしい……」

魂が半分抜けたみたいな声に、山口が小さく笑う。

「……たく。いつまでも熱い熱いって、子供なの？」

おかげでこっちはちっとも落ち着かなかったんだけど」

月島が呆れたように眼鏡を押し上げ、濡れた髪を拭きながら戻ってくる。

「……うるせえ……あんなの、」

火の中に飛び込むようなもんだろ……」

「大げさだなあ。あ、影山、裸のままだと湯冷めするよ。」

せっかく温まったんだから、ちゃんと服着ないと」

山口が上着を差し出す。けれど影山は、火照った体に夜風を当てるみたいに、ぼんやり焚き火を見つめたまま動かない。

白い肌が湯気の名残に晒されてうっすら赤い。

月明かりに照らされると、それがやけに目についた。

肩の線とか、濡れた髪の手から落ちる雫とか、そういうのがひとつひとつ妙に気になってなんでか目が逸らせない。

やばい………なんだこれ。

さっきまであんなにうるさく暴れてたのに、

今は妙に静かで、そのせいか余計にどきどきする。

「……お、おい、影山くんよ。だからだしてないで、

ちゃんと服着ろよ。一与さんってやつに怒られるぞ！」

慌てて声をかけて、上着を押しつける。

顔が熱いのは、温泉のせいじゃない気がした。

「……一与さん……」

ああ……一与さんは、めんてなんすに厳しかったからな。

『生活の乱れは心の乱れ』って」

影山は少しだけ目を細めて、

どこか懐かしそうに服へ腕を通した。

その何気ない横顔にまで、また胸の奥が変に騒ぐ。

「……ねえ、影山。一与さんってどんな人？」

山口に聞かれて、影山は焚き火を見つめたまま、

ぼつりぼつりと話し始めた。

「……俺にとっては、神様みたいな人だった。

……魔法も、一与さんに全部教わった。

……亡くなる少し前、一与さんは俺に——」

火が小さく爆ぜる。

「飛雄、お前の魔法はすごい。けど、まだ半分だ。その半分以上を埋めてくれる奴が必ず現れるから、それまで毎日しっかりと修行を続けなさい」……って」
静かな声が夜の森に溶けていく。

「……魔法を、完成させてくれる奴……」

その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がびくつとした。影山の風に乗って空を飛んだ時の、あの体ごと浮き上がるみたいな感覚を思い出す。心臓が跳ねて、血が熱くなるような、あの感じ。

「……それって、絶対俺のことだよな！」

「……ああ？　なんでそうなるんだよボケェ」

「勘だよ！　いいじゃん、勝手に思うくらい！」

影山の魔法、全部うまく使えるの俺だろうし、多分！」

「……ふん」

影山は鼻を鳴らした。でも、嫌そうではなかった。焚き火の向こうで揺れたその横顔を見て、また胸がうるさくなる。

たぶん俺は、もうとつくに目が離せなくなってる。青の国の月は、どこまでもやさしく、俺たちを照らしていた。少し離れたところで、月島が深いため息をつく。

(ナニアレ……思い上がりもあそこまで来たら、いっそ清々しいんだけど)

(しつ、ツツキー!! いやあ、まさか日向……ええええ!! そうなんだあ……!!)

驚きを隠せない山口と、呆れ果てる月島の夜も、月の光の下で静かに更けていった。

あの日の出逢いから、青の国に入って二週間。
何故だかどうしてか、俺は影山のそばを離れられなかった。

「なあなあ影山！

さっきの風のやつ、もう一回見せてくれよ!!」

「……魔力の無駄遣いさせんな、ボケエ」

「いいじゃんケチ！ じゃあ光の矢は!？」

あれ、どうやって出してんの!？」

「思った通りに飛ばすだけだ。うるせえ、離れろ」

「すっげえええ!!」

「うるせえって言ってんだろ！」

だいたい投げ飛ばされるか怒られるのに、
気づけば体が勝手に影山のほうへ向いている。
もつと話したい。もつとこつちを見てほしい。そんなふう
に、気づくと後ろをついて回ってしまっているのだ。

そんな俺の背中に、とうとう月島の冷たい声突き刺さる。

「……チョット、君。いい加減にしてくれない？」

襟首をひよいと掴まれ、無理やり立ち止まらされる。
突然の浮遊感より、掴まれたことで影山との距離が開いてし
まう方がなんか嫌だと思ってしまう。

「ふえっ!? なんだよ月島！」

「なんだよ、じゃないデシヨ。いくら気になるからって、

そんな雑みたいに一日中ついて回られたら、さすがにあの
バカでも嫌になるんじゃない？」

——嫌われる前にやめなよ。見苦しい」

「えっ……き、嫌われる……?」

嫌い——その言葉だけで、心臓がびくつと跳ねた。

「……無自覚なの？ 傍から見ただけで、視線がうるさい位
好き好き言ってる目障りなんだけど。気持ち悪い」

「す、好きっ……!? ち、ちがっ……!!」

俺はただ、あいつの魔法がすぐくて、相棒として……!」

「はいはい、相棒ね。でも、普通の相棒なら

『アイツのまつ毛、長いな』とか

『肌綺麗だな』なんて思ったりしないデシヨ？

……何キミ、本当に無自覚なの？」

「っっ………!!!」

頭の中が真っ白になった。
言われてみれば、そうだった。

影山が魔法を使う時の横顔とか、
風呂上がりの火照った肌とか、
思い出すだけで心臓がうるさくなる。
胸の奥がぐわっと熱くなって、
落ち着かなくなる。

「……俺……影山のこと……」

「ようやく気づいた？おめでとう。

……山口、行くよ。これ以上バカの相手してる暇ないし」

「あはは……日向、頑張ってるね？」

二人に置いていかれて、俺はその場で真っ赤になったまま固まる。その少し先で、ようやく俺がついてきてないことに気づいた影山が、めんどくさそうに振り返る。

「おい、日向！何してんだ、置いてくぞポケェ！」
「っ、ひ、ふえいっ!!!」

名前を呼ばただけで、心臓が口から飛び出そうになる。

——俺、あいつのこと………!!

うわああああ!! マジか俺——!!

でも、不思議と嫌な気持ちはひとつもなかった。
そっか。俺、影山のこと好きなんだ。

そう思った瞬間、なんかもう、全部しっくりきた。
俺の初めての恋。

前途多難な気しかしらないけど、絶対叶えてみせる。
待ってる影山!!

「……アイツ、何してんだ？」

顔を真っ赤にしたまま動かない俺を、
影山は小首を傾げて不思議そうに見ていた。

青の国の街に入り、色んな交易品が集まるマーケットを、きよろぎよろししながら見て回っていた日のことだ。

賑やかな通りに面した、すげえ怪しい店の先で、これまたすげえ怪しいハゲたじいさんが、水晶玉を覗き込み、俺を見ながらにやりと笑った。

「ほほう。そのオレンジの少年……そう、お主じゃ。

お主、隣の少年のことが気になって仕方がなかるう？」

「ぶふっ……!? な、な、何をッ!!」

俺が一瞬で真っ赤になるのも構わず、じいさんは今度は影山を指差す。

「そして黒髪の少年。お主もじゃ。

無意識にこやつの動きを追っておる。

……………お主の魂が、

こやつを『自分の半分』だと認めておるわい」

「……あ？ 俺がこいつを？」

影山は眉間に皺を寄せ、それでも当然みたいな顔で言う。

「当たり前だろ。こいつ、放っておくとどっか行くし、俺が風を送ってやらねえと飛べねえんだから。しっかり見てやるのは当然だ」

「……ブブ。それを世間では恋、あるいは運命と呼ぶんだよ。良かったねチビ、両思いじゃん」

後ろから月島が呆れたように通り過ぎていく。

「お主ら二人の相性は、まさに『光と影』。

一方が欠ければ、もう一方も完成せぬ。

……ふおっふおっふおっ、仲良くしなされよ」

影山は「何言ってるんだアイツ？」と

鼻を鳴らして歩き出した。

その後ろ姿を見たまま、

俺は破裂しそうな心臓を押さえて動けなくなる。

(……俺の、半分……影山も……俺のこと……!?)

俺たちの旅は、まだ始まったばかり！